

考古学者の書棚

「貝塚の考古学」

鈴木公雄 著／東京大学出版会(1989)

千葉 毅

先日、千葉市に六通貝塚を訪ねた。ハマグリやキサゴ、ツメタガイなどの貝殻が畑一面に散布している様は、あたかも季節はずれの雪が積もったかのようにであった。

予習をほとんどしないまま現地に立った私は「厚く堆積した貝層を前にいくら考えていても、よくもまあこんなに貝を食べたものだ、という感想がわくくらいで、そこからすぐに何か有効な情報や知識が得られるとはかぎらない」という『貝塚の考古学』での鈴木公雄の記述を思い出していた。

本書は、1970～1980年代に著者が手がけた貝塚研究の成果をまとめたもので、I 貝塚と考古学研究、II 貝塚を量る、III 貝殻のメッセージ、IV 魚骨は語る、V 文化遺産としての貝塚、といった5章構成になっている。

本書では、モースによる大森貝塚発掘以来の貝塚調査研究史が簡潔に整理されつつ、そこから派生する課題、あるいは貝塚調査における方法論やサンプリング、さらには日米の貝塚の現状を比較しながら貝塚を保存する意義などにも議論は波及していく。もちろん、どの章も魅力的な内容を含むが、私は貝塚の総量を数値化し、評価するための方法論が実践的に示された「II 貝塚を量る」が好きだ。

著者は1978年から1981年に東京都伊皿子貝塚の調査を実施した。この調査では、貝塚に残された貝が先史時代の食料源としてどのように評価できるのかを確かめることが一つの目的とされた。食料として評価するためには「出土した大量の貝殻」の状態から様々な変換を行ない、有用な情報を引き出さなくてはならない。本章ではこの過程での方法や考え方が丁寧に解説されている。

まず、貝塚の体積を求める方法が検討される。著者は「コンター法」「角柱法」「平均厚さ法」という3つの方法を提示した上で、それぞれの方法で求積を行なった。複数の方法を実施したのは「それぞれの方法に長所と短所があること、それぞれによって得られた結果はどのくらい異なるのかを比較することから、最も経済的で精度の良い求積方法は何かを明らかにする」ためであるという。調査方法の実践的模索、それを読者と共有しようとする配慮は著者ならではの、と思う。この結果、最も精度が良いのは「コンター法」であるという結果が得られた。さらに他の方法においても大きな誤差なく求積が可能であることが示され、今後の貝塚調査に際しても、調査の進行や経済的な面を考慮しながらこれらの方法を応用していくことが推奨されている。これにより、伊皿子貝塚の体積は290.3m³という数値が得られた。

次の段階として、貝塚の体積を貝殻の重量に変換する必要がある。貝塚には貝殻以外の遺物や土砂なども多く含まれるからである。詳細に踏み込む余裕はないが、ここでも著者は複数の方法を実施し比較検討する。いずれの方法でもサンプルを多く採取し、そこで得られた比率をどのように全体に還元するかが比較されている。この結果、貝殻の重量は200.18tであることが分かった。続いて、これを貝種ごとの体積に分ける。これもサンプルの分析から得られた貝種の構成比率を全体に

かけることで得ることが出来る。

次に、食品成分表から各貝種の廃棄率を引用し、重量から栄養価や蛋白量を算出する。このような過程を経て、伊皿子貝塚の貝類からは3655kcalの熱量が得られることが分かった。

最後にこれを貝塚形成期間や形成人数で割ることにより、一人当たりのエネルギーや蛋白量に変換する。集落人口が30人程度で、25年ほどの期間で貝塚が形成された場合、これらの貝によりまかなうことができるのは、1日に必要なカロリーーの約13～18%、蛋白量では50%という数値が得られ、「カロリーーはともかくとして、蛋白質の供給源としてはかなり重要」という結論に至った。

ただこの中で私は、上記の精緻な貝塚分析に比べると人口や集落継続年数の復元方法はやや検討が浅いようにも思える。もちろんこれらの課題を解決するのは容易なことではないが、だからこそ著者の柔軟なアイデアでこれらの課題に立ち向かう様を見てみたかったとも思う。

いずれにしても、貝塚研究に限らず、著者の研究は明快であるものが多い。それはまず論理の組み立てがしっかりとしており、研究対象に対する問題意識とその解決のための方法論が明示されているからである。また方法論の提示に際しても、その方法論的弱点や限界についてもきちんと説明がなされており、著者が行なう議論を読者と共有するための配慮がなされるものが多い。内容についてももちろんだが、こういった点は今日でも見習うべき部分だろう。

私が本書の著者である鈴木公雄先生に初めてお会いしたのは、2004年5月に開かれた慶應義塾大学民族学考古学専攻設立25周年パーティでの席上であった。鈴木先生は名誉教授となられ、また体調も崩されていた中で、大学へいらっしやる機会はほとんどなかった。当時私は学部2年生、専攻に入ってひと月の頃である。右も左も分からないまま、鈴木先生が研究者仲間とのお話の最中であつたところに割って入り、ご挨拶させていただいた。今から思えば甚だ不躰な学生であつたが、鈴木先生は優しくこちらの話に耳を傾けられ「若いうちは耳学問をしなさい」とおっしゃった後、また仲間との会話に戻られた(この時、鈴木先生が交歓していた方が赤澤威先生だったということは大分後になって知った)。鈴木先生はその年の10月22日にご逝去され、このパーティ席上での会話が私が鈴木先生と交わした最初で最後のそれとなった。「耳学問」は、鈴木先生がどのような意味を含めた言葉だったのかは分からないが、それ以来、私にとっての大事な言葉の一つとなった。

本誌が刊行される2016年10月は鈴木先生の13回忌にあたる月となる。改めて故人のご冥福をお祈りするとともに、鈴木先生の学恩に感謝したい。

アルカ通信 No.157

発行日 2016年10月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp